

Yaneura or Attic as a Space for Literary Imagination : A Proposed Comparative Study

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-07-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅原, 克也 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1230

《研究ノート》

屋根裏という文学空間

—比較研究の構想—

菅原 克也

「屋根裏」ということばを手がかりに、屋根裏という空間と、屋根裏という場所から立ちあられる文学的・藝術的想像力について考えてみたい。

本稿は、構想の段階にある比較文学研究として、屋根裏に関わる問題のあれこれを備忘として書き留めておくことを目的とする。

詩人・藝術家と屋根裏

屋根裏という空間が意味するものについて、まずは萩原朔太郎（1886～1942）の引用からはじめよう。全集の「ノート三」に収める「敘情詩と散文詩と散文」に、次のようなくだりがある。

私が最も大なる興味と好奇心とを以て考へるものは、酒場にみないときのエルレーヌの生活である。恐らく彼は安下宿の家根裏で阿片の夢を見てみたか、もしさもなければ「何を」考へてみたか？

「何を。」

ここに現実の悲哀がある。もしエルレーヌが昼も夢みる阿片中毒者であつたならば、そしてボドレエルの言ふやうな「いつも酒又は藝術に酔つぱらつて」みるならば、それは絶対の幸福であつたにちがひない¹⁾。

フランス象徴派の詩人ポール・ヴェルレーヌ（Paul Marie Verlaine, 1844～1896）について、象徴主義の詩から多くを学んだ朔太郎が、その藝術生活のありさまを想像してみせるところである。ここに具体的に想像されている二つの場所、すなわち酒場と（下宿の）屋根裏とは、詩人の生活空間として、とくべつな意味を担うところと考えられているであろう。つねに「酔っぱらっている」詩人が阿片とともに藝術の夢を紡ぐのが、屋根裏の空間であるとされるのである。

詩人、藝術家と屋根裏という空間との結びつきは、以下に引用するホフマン（Ernst Theodor Amadeus Hoffmann, 1776～1822）の「隅の窓」（の翻訳）にもあらわれる。

言い忘れていたが、私の従兄は狭くて天井の低い屋根裏部屋に住んでいる。作家や詩人におなじみの住居であり、天井が低いからといって、それがどうだろう？ 想像力が

舞いあがり、美しく輝いている青空に高々とうれいしい天蓋を張りわたすというものだ。だからして詩人の小部屋は四つの壁にとざされ、猫の額ほどの庭同然であろうとも、いつも美しい高度を保っているものだが、かててくわえて従兄の住居は、この首都にあってとびきりの場所にあった。つまり市（いち）のたつ広場に面しており、広場の周囲には美しい建物がたちならび、まん中に重々しく、おごそかな造りの劇場がそびえている。そんな広場の隅にあって、小部屋の窓からはひろやかな広場のパノラマを見はるかすことができた²⁾。

ここにみられるのは、作家や詩人とは屋根裏部屋に住んでいる人種で、屋根裏部屋は作家や詩人にこそふさわしい空間であるとする、作家・詩人（藝術家）と屋根裏との結びつきを当然視する考え方である。屋根裏という空間の意味づけも興味深い。屋根裏は天井の低い、四囲を壁に囲まれた狭い空間ではあるが、作家・詩人が羽ばたかせる想像力は、低い屋根の下に跼蹐することがない。屋根裏に住まう作家・詩人の頭上には想像の青空がひろがっている、作家・詩人の想像力は青空に飛翔し、高みにあって制約から自由である、というのである。屋根裏の現実的な記述も面白い。この屋根裏部屋は大都会の繁華な広場に面しており、広場の中心には厳めしい劇場の建物もある。狭い部屋は、屋根裏の高さにあるからこそ、広場の全景を見渡す位置にある。それは部屋の狭さが広場の広さと、屋根裏の高みが地上の低さに対置される記号学的対立を前提としつつ、藝術家の想像力の飛翔が階上の屋根裏においてこそ可能である点を示唆すると考えることもできる。

マンサルド mansarde の空間

ジャコモ・プッチーニ（Giacomo Puccini, 1858～1924）のオペラ『ラ・ボエーム』（*La bohème*, 1896）の第1場と第4場は、若い藝術家たちの住まう屋根裏の空間が舞台となる³⁾。

第1場のト書きのはじめに「屋根裏部屋にて」（*In soffitta*）とあり、そのあと「大きな窓。そこから雪に覆われたいくつもの屋根が一目に見渡せる。」⁴⁾との説明が続く。第2場は「カルティエ・ラタン」、第3場が「アンフェール門」（*La Barriera d'Enfer/La barriera d'Enfer*）と具体的な地名が名ざされるように、そこはパリ左岸の街なかの屋根裏である。

屋根裏部屋には画家、詩人、音楽家、哲学者たらんとする貧しい青年たちが同居して、将来の夢を育んでいる。この屋根裏の部屋で詩人ロドロフォとお針子ミミの恋が生まれる。二人は互いの気持ちの齟齬から一旦は別れてしまうが、やがてミミが死の病を得たと知ると、ロドロフォは屋根裏の部屋で手厚く看護し、仲間たちは各々自分の持ち物を処分して、ミミの治療費を工面しようとする。

若い藝術家たち（ここには哲学者もふくまれる）が住まい、ミミが息を引きたる屋根裏の空間は、フランス語では「マンサルド」と呼ばれる最上階の部屋である。マンサルド *mansarde* はフランスのバロック期の建築家フランソワ・マンサール（*François Mansart*, 1598～1666）の名にちなむ。英語では *mansard roof* といい、日本語でも「マンサード屋根」という名称が用いられる。マンサルド（マンサード）は寄棟で二段の勾配をもつ屋根の構造を指すとともに、そのような屋根の下に設けられる部屋の名称として用いられる。パリの街に

よく見られる黒い大きな屋根と、その屋根裏の空間を利用した窓のある部屋のことである。

日本語の「屋根裏」にあたるフランス語には、ほかにコンブル *combles* およびグルニエ *grenier* がある。コンブルは単数形 *comble* で屋根の構造物（屋根組み）を意味し、複数形 *combles* で屋根裏を指す。棟木や梁（あるいは鉄骨）がむき出しになった（多くは三角形）の屋根の下の空間である⁵⁾。グルニエは元来穀物等を蓄えた（屋根裏の）倉庫のこと。そこを物置に使ったり人が住むようになったりすると屋根裏部屋になる⁶⁾。これに対しマンサルドは、屋根の勾配が二段に分かれるため天井下の空間がかなり大きくなる。内部から見ると壁が上方に向かって斜めに迫りだすことになるが、窓は大きく取れる。人間が居住することを想定した空間設計であると言えよう。

屋根裏をあらわすフランス語表現を確かめる上で参考となるのが、ガストン・バシュラール (*Gaston Bachelard*, 1884~1962) の『空間の詩学』*La poétique de l'espace* の第一章「家・地下室から屋根裏へ・隠れ家の意味」*La maison—De la cave au grenier—Le sens de la hutte* である。詩的イメージの現象学的記述にすぐれたバシュラールは、家の構造において垂直の軸を形成する地下室と屋根裏とを比較した哲学的考察のなかで、屋根裏について次のように書く。

(…) 屋根裏部屋がなくなってしまうとしても、マンサルドが失われてしまったとしても、屋根裏部屋を愛し、マンサルドで生きた経験はいつまでも残ることだろう。そこは夜の夢のなかで帰ってゆくところ。

(…) *même lorsqu'on n'a plus de grenier, même lorsqu'on a perdu la mansarde, il restera toujours qu'on a aimé un grenier, qu'on a vécu dans une mansarde. On y retourne dans les songes de la nuit.*⁷⁾

屋根裏の空間を「奥まった隠れ家・待避所のようなところ」*réduits* と言うバシュラールは、屋根裏の空間を名ざす際 *grenier* という語と *mansarde* という語をまったく同格に用いる。バシュラールにとって、この二つの語は互換可能の語であったようである。本来なら *grenier* は類概念、*mansarde* は種概念として区別されてもよいはずだが、屋根裏と言えばマンサルドという意識が深く根を張っているためなのだろう。この意識は多くのフランス人、さらにはフランス文明を範とした多くのヨーロッパ人に広まったようである。マンサルドはドイツ語でも *Mansarde* という形で用いられる。イタリア語は *mansarda* である。

フランス語で屋根裏を意味する表現として言い落とせないのが *sous le toit* (*sous les toits*) [文字通り「屋根のした」の意] という成句である。*habiter sous les toits* は「屋根裏（部屋）に住む」の意で慣用表現である。『巴里の屋根の下』として日本では知られるルネ・クレール監督 (*René Clair*, 1898~1981) の映画の原題は *Sous les toits de Paris* (1930年公開)。作中の歌もシャンソン「巴里の屋根の下」(*Sous les toits de Paris*) として知られる。『巴里の屋根の下』のポーラが住む屋根裏は、映画のセットのためもあってか、かなり天井の低い粗末な屋根裏部屋で、形状から見てマンサルドとは言いがたい。

ギャレット garret とアティック attic

英語では屋根裏の空間を表す語としてギャレット garret とアティック attic がある⁸⁾。一応語義をみておこう。OED によれば garret はもと小塔 (turret) の意味であったものが建物の最上階の部屋をあらわすようになった。具体的には “A room on the uppermost floor of a house; an apartment formed either partially or wholly within the roof, an attic” とあるので「最上階の、屋根組の下の部屋」を指すと了解してよいであろう。attic の方の第一義は “A decorative structure, consisting of a small order (column and entablature) placed above another order of much greater height constituting the main façade” で、アチック様式 Attic order と呼ばれる飾りのついた壁が建物本体の別様式の壁の上部に載ったものを指すようである。研究社『新英和大辞典』には「ギリシア建築の軒蛇腹の上の細長い横壁」との記述がある⁹⁾。第二義は、このアチック壁に囲まれた空間をふまえた “the top storey of a building, under the beams of the roof, when there are more than two storeys above the ground” で、屋根の梁や桁が剥きだしになった最上階の部屋の意味になり、第三義はより簡明に “The highest story of a house, or a room in it; a garret” と単に建物の最上階の部屋を指すようになった。

バーネット (Frances Hodgson Burnett, 1849~1924) の『小公女』*A Little Princess* (1905) の主人公サラ (セーラ) は、インドで働く父の富を背景に、ロンドンのミンチン女学校で王女のような生活を送っていたが、サラの誕生日を盛大に祝う最中に現れた事務弁護士 solicitor によって、父の死とその破産が告げられる。サラの父の莫大な財産をあてにしてサラを甘やかしていたミンチン先生は、ただちに学校の台所下働き scullery maid であるベッキーとともに屋根裏で暮らすようサラに命じる。この時のミンチン先生のことばは

“You are to sleep in the attic next to Becky.”¹⁰⁾

である。この後サラは、年少の生徒に教えるかたわら、学校の雑務をこなしつつ、屋根裏 attic で暮らすようになる。

印象的な屋根裏の空間が描かれる小説に、シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816~1855) の『ジェーン・エア』*Jane Eyre* (1847) がある。孤児となり遠戚のリード夫人に預けられたジェーンは、9歳のころ厄介払いに慈善寄宿学校のローウッド学院に追いやられ、そこで生徒として6年、教師として2年の歳月を過ごす。18歳になったジェーンは自立を思い立って家庭教師の新聞広告を出し、返事をもらったソーンフィールド邸で住み込みの教師をはじめめる。館へ到着した翌日、ジェーンは管理人のフェアファックス夫人に邸内を案内される。

(…)「フェアファックス様、どちらへおいでですか？」その場を離れようとする彼女を見て言った。

「屋上へ参りましょう。あそこからの眺めをご覧になりませんか。」私はついていくことにした。屋根裏までとても狭い階段を上り、そこからさらに梯子をつたい、跳ね戸を

開けて、館の屋上に出た。

(…) ‘Where are you going now, Mrs Fairfax?’ for she was moving away.

‘On to the leads; will you come and see the view from thence?’ I followed still, up a very narrow staircase to the attics, and thence by a ladder and through a trap-door to the roof of the hall.¹¹⁾

lead(s) は鉛の屋根板で葺いた陸屋根のこと。そこへ出ると屋上からのすばらしい眺めが見られるというフェアファックス夫人の配慮である。経路を考えると、階上の屋根裏 attic までは狭いながらも階段があり、屋根裏の床から天井裏に架けた梯子を伝い、天井をくり抜いた撥ね戸を開けると、胸壁のついた陸屋根へ出られるという構造になっているのがわかる。屋上からの景色を堪能したジェーンは階下に下りる。

フェアファックスさんはあとに残って跳ね戸の戸締まりをした。そのあいだ私は、手探りでなんとか屋根裏の出口を見つけ、狭い屋根裏の階段を降りはじめた。

Mrs Fairfax stayed behind a moment to fasten the trap-door. I, by dint of groping, found the outlet from the attic, and proceeded to descend the narrow garret staircase.¹²⁾

ここには attic と garret とが同時に使用されているが、attic という空間から階下に降りる階段を garret の狭い階段と言い替えたままで、異なるものが名ざされているわけではあるまい。ジェーンは屋根裏から続く三階の「狭く、天井の低い、薄暗い」廊下へ降りて、まるで青髯の城のようだと感じる。そのとき、物語の核心に関わる不思議な笑い声を耳にするのである。

ちなみに、バシュラルの『空間の詩学』には英訳があり、屋根裏部屋を論じた前引の箇所は次のように翻訳されている。

(…) even when we no longer have a garret, when the attic room is lost and gone, there remains the fact that we once loved a garret, once lived in the attic. We return to them in our night dreams.¹³⁾

フランス語原文の grenier が garret に、mansarde が attic に対応する形になっているのがわかる。garret と attic は、言い替え可能な同義の表現と捉えてよいようである。

屋根裏をめぐる表現

以上のことから分かるように、屋根裏(部屋)を表す表現としてどのようなことばが用いられるかは、個々の例で確かめてみる必要がある。これに関わる難しい問題が、たとえばドストエフスキー(Фёдор Достоевский, 1821~1881)の『罪と罰』Преступление и наказание(1866)にはある。以下、江川卓訳で冒頭の部分を示す。

七月はじめ、めっぽう暑いさかりのある日暮れどき、ひとりの青年が、S横町にまた借りしている狭くらしい小部屋からおもてに出て、のろくさと、どこかためらいがちに、K橋のほうへ歩き出した。

青年はうまいこと階段で下宿の主婦（おかみ）と出くわさずにすんだ。彼の小部屋は、五階建ての建物をのぼりつめた屋根裏にあり、部屋というより戸棚という感じだった。

В начале июля, в чрезвычайно жаркое время, под вечер, один молодой человек вышел из своей каморки, которую нанимал от жильцов в С—м переулке, на улицу и медленно, как бы в нерешимости, отправился к К—ну мосту.

Он благополучно избегнул встречи с своею хозяйкой на лестнице. Каморка его приходилась под самую кровлей высокого пятиэтажного дома и походила более на шкаф, чем на квартиру. (…)¹⁴⁾

主人公ラスコーリニコフの住む部屋は「五階建ての建物をのぼりつめた屋根裏に」あるわけだが、この「屋根裏」は最上階の五階（ロシア語の「階」の数え方は日本語と同じ）に位置するという意味であって、五階のフロアのさらに上の屋根裏の空間が「小部屋」として使われている、という意味ではない。ここにあらわれる「小部屋」は *каморка* (*kamorka*) である。ロシア語で一般に屋根裏部屋を表す語は *чердак* (*cherdak*) で、これは英語の *attic* が連想させる（船底形の屋根の下の狭苦しい）空間を表すと考えてよいようである。ちなみにロシア語には *мансарда* も *мансарда* (*mansarda*) の形で入っている¹⁵⁾。

こころみに、『罪と罰』の英訳および仏訳のいくつかを比較してみると、ラスコーリニコフの部屋の名称とその性質をめぐる解釈の違いが見えてくる。まずは「エヴリマンズ・ライブラリー」で現在流布している訳。

At the beginning of July, during an extremely hot spell, towards evening, a young man left the closet he rented from tenants in S—y Lane, walked out to the street, and slowly, as if indecisively, headed for the K—n Bridge.

He had safely avoided meeting his landlady on the stairs. His closet was located just under the roof of a tall, five-storied house, and was more like a cupboard than a room. (…)
[Translated by Richard Pevear and Larissa Volokhonsky]¹⁶⁾

この訳ではラスコーリニコフの小部屋は一貫して *closet* と訳されている。ロシア語原文の *каморка* (*kamorka*) に対応する語としてもっとも穏当な選択と言えよう。この小部屋が「五階建ての高い家の屋根の真下にある」という説明も、部屋と屋根との関係を即物的に記述する訳し方で、ロシア語原文の表現に近いはずである。

日本のロシア文学受容に大きな影響を残したコンスタンス・ガーネット (Constance Clara Garnett, 1861~1946) の訳は次のようになっている。

On an exceptionally hot evening early in July a young man came out of the garret in

which he lodged in S. Place and walked slowly, as though in hesitation, towards K. Bridge.

He had successfully avoided meeting his landlady on the staircase. His garret was under the roof of a high, five-storied house, and was more like a cupboard than a room.¹⁷⁾

小部屋は屋根裏部屋の意味を持つ garret と訳される。ラスコーリニコフは五階建ての大きな建物の最上階の屋根裏部屋に住まうことになる。

最後にプレイヤーード版に収められた仏訳をみてみよう。

Par une soirée extrêmement chaude du début de juillet, un jeune homme sortit de la toute petite chambre qu'il louait dans la ruelle S... et se dirigea d'un pas indécis et lent vers le pont K...

Il eut la chance de ne pas rencontrer sa propriétaire dans l'escalier.

Sa mansarde se trouvait sous le toit d'une grande maison à cinq étages et ressemblait plutôt à un placard qu'à une pièce. [Traduit par D. Ergaz]¹⁸⁾

第一段落で「きわめて小さな寝室」と訳されていた小部屋が、第三段落では「かれのマンサルドは五階建ての大きな家の屋根の下にあった……」とマンサルドに言い換えられている。これは部屋そのものの属性には拘らず、建物全体からみた部屋の位置を伝えようとした訳であるのだろう。ただしパリの読者にとってのマンサルドと、19世紀のペテルブルクの五階建て最上階の小部屋は、イメージの大きな落差を含んでいただろうと想像される。

ロシア文学者の亀山郁夫は、このラスコーリニコフの住む部屋を一貫して「屋根裏部屋」と表現する¹⁹⁾。その上で、この屋根裏部屋は「彼の精神性のシンボルとして意味づけ」るべきだとし²⁰⁾、「(地下室とは逆に)建物全体の頂点にある」屋根裏部屋は「頂点にありながら悲惨と同居する空間」であって、「ナポレオン主義にかぶれた彼の精神性のメタファー」であるという解釈を示している²¹⁾。

『罪と罰』の「小部屋」は、作中で「戸棚」「トランク」「船室」「棺桶」等にたとえられるが、これらの表現があくまで比喩であるのに対し、「屋根裏部屋」は小部屋の属性をあらわす。江川訳で「五階建ての建物をのほりつめた屋根裏」とあるのは、五階建ての建物の「屋根の真下」が原義であるが²²⁾、これを「屋根裏」という言葉で了解するのは、建築物の構造を想像し、理解しようとする(われわれ)読者の異文化理解がそのようなかたちをとるのだ、と考えるべきことかもしれない。同じことはプレイヤーード版を読むフランスの読者にも生じていたであろう。建物の最上階の部屋をめぐる読者の想像力のありかたは、読者が身を置く文化によって異なる。その点にわれわれは留意しておかなくてはならない。

というのも、先に引いたホフマンの「隅の窓」(Des Vettters Eckfenster: 原義「いとこの隅の窓」)の「狭くて天井の低い屋根裏部屋」も、原典をあたってみれば、

Es ist nötig zu sagen, daß mein Vetter ziemlich hoch in kleinen niedrigen Zimmern wohnt.²³⁾

とある文の *kleine niedrige Zimmer*（ちいさな天井の低い部屋）が「屋根裏部屋」として了解される訳者（池内紀）の文化理解が反映されていたからである。「屋根裏」もしくは「屋根裏部屋」という表現は、西洋起源の建築物の構造を理解する際の、汎用度の高い融通無碍な日本語の語彙であると、まずは認識すべきであろう。

日本文学にあらわれる屋根裏

ヨーロッパ文学に倣うことで成立した日本の近代文学において、屋根裏という空間が描かれる早い例が、森鷗外（1862～1922）の「舞姫」（1890年『国民之友』に発表）にある。

人の見るが厭はしさに、早足に行く少女の跡に付き、寺の筋向ひなる大戸を入れ、欠け損じたる石の梯あり。これを上ぼりて、四階目に腰を折りて潜るべき程の戸あり。（…）この処は所謂「マンサルド」の街に面したる一間なれば、天井もなし。隅の屋根裏より窓に向ひて斜に下れる梁を、紙にて張りたる下の、立たば頭の支ふべき処に臥床あり²⁴⁾。

建物の「階」を数える際のドイツ語は、フランス語やイギリス英語と同じく「四階」が日本語の五階になる。鷗外がわざわざ「四階目」と「目」を加えたのは、ドイツ語の表現に倣ったとみるべきで、エリスの住む住居は五階にあったと考えられる²⁵⁾。

ここに描かれる「マンサルド」は、貧窮に苦しむ一家の暮しをよく表している。傷んだ石の階段を上りつめると背を屈めて入る小さな戸がある。ドアノブはなく、錆びた針金を曲げて代用したところに貧しさが見える。戸口に入ってすぐのところ台所。右手の低い窓には白い麻布のカーテンが下がり、左手には粗末なレンガの竈が据えてある。竈わきの戸を開くと居室で、屋根裏の斜めの梁に紙を張ったあたり、立てば頭がつかえるところにベッドが置かれている。

これはマンサルドそのものの描写としても面白い。背の低い入り口のドアがあり、天井を張らず斜めの梁がむきだして、頭がつかえそうな屋根裏の空間である。ランプを点したその部屋で、太田豊太郎は新聞の原稿を書く。

『日本国語大辞典』（小学館）で「屋根裏」を引くと、近世の用例とは区別される近代の用例として初めに挙げられるのが、夏目漱石（1867～1916）の「カーライル博物館」（1905年『学燈』に発表）である。屋根裏は次のように描かれる。

四階へ来た時は縹渺として何事とも知らず嬉しかつた。嬉しいといふよりはどことなく妙であつた。こゝは屋根裏である。天井を見ると左右は低く中央が高く馬の鬣（たてがみ）の如き形ちをして其一番高い脊筋を通して硝子張りの明り取りが着いて居る。此アチツクに洩れて来る光線は皆頭の上から真直に這入る。さうして其頭の上は硝子一枚を隔て、全世界に通ずる大空である。眼に遮るものは微塵もない。カーライルは自分の経営で此室を作つた。作つて此を書斎とした。書斎としてこゝに立籠つた。立籠つて見

て始めてわが計画の非なる事を悟つた。夏は暑くて居りにく、冬は寒くて居りにくい。案内者は朗読的にこゝ迄述べて余を顧りみた。真丸な顔の底に笑の影が見える。余は無言の儘うなづく²⁶⁾。

「屋根裏」の語とともにわざわざ「アチツク」の語があらわれるのは、この四階の書齋が一般に attic study として知られているからでもあろう²⁷⁾。室内からみた屋根裏の形状を馬のたてがみに喩えたところはなるほどと思えるし、明り取りの頭上の窓には青空が広がっていて、それが全世界に通じるとするところも、屋根裏という空間を意味づけるものとしての確である。

さて、日本の近代小説で「屋根裏」を表題にふくむ作品が集中してあらわれる時期がある。以下に一覧を示す通り大正期のことである。

宇野浩二「屋根裏の法学士」大正7(1918)年
吉屋信子「屋根裏の二処女」大正8(1919)年
宇野浩二「屋根裏の恋人」大正11(1922)年
江戸川乱歩「屋根裏の散歩者」大正14(1925)年

いささかこじつけめくが、屋根に関わる表題に着目して昭和初期まで視野を広げると、次のような作品も目にとまる。

菊池寛「屋上の狂人」大正5(1916)年
井伏鱒二「屋根の上のサワン」昭和2(1927)年

「屋根裏」に限定すると、宇野浩二(1891~1961)の「屋根裏の法学士」が早い例になるが、この小説の本文に「屋根裏」の語が現れることはないし、本来の屋根裏らしき空間が描かれることもない。同じ宇野浩二による「屋根裏の恋人」の屋根裏は、間借りした二階の部屋のことである。江戸川乱歩(1894~1965)の「屋根裏の散歩者」の屋根裏は日本家屋の天井裏で、主人公たる散歩者は押し入れの天井板からこの狭い空間に出入りすることになる。

多少とも屋根裏らしい空間が描かれるのが吉屋信子(1896~1973)の「屋根裏の二処女」である。

章子と舎監の今足を止めた場所は、ほんの階段の中腹であった——そこから折り返してさらに一つの階段を経て、その上の床に——この建物の最後の頂上の床にすべての室(へや)の最上部に張られた床の上に立つのであった。

(…)

入口に置かれて第一に踏まれる畳の示す方形の如く、部屋そのものの形は三角形であった。三角形の——それは正三角形に近きもの——部屋は扉と同じ濃い青色の板壁で張りつめられてあった。

そして、貴い何物にも較べることの出来ない優しい頼もしい威儀を持って一つの小窓が上方、高さ高さ板壁の上に切り抜かれてある²⁸⁾。

女学校の寮の「最後の頂上の床にすべての室の最上部に張られた床」とは、どのような建物のどのような構造をいったものか不明ではあるが、ともかくそれは建物のもっとも高いところにある（正三角形をした）部屋で、板壁の高いところに小窓が一つ切つてある空間だということになる。

スーヴェストル『屋根裏の哲人』

博文館発行の『中学世界』に1898年9月から1930年5月まで連載された宇野浩二の「屋根裏の法学士」については、すでにエミール・スーヴェストルの『屋根裏の哲人』の影響を指摘する研究がある²⁹⁾。スーヴェストル(Emile Souvestre, 1806~1854)は、現在ではブルターニュの地方民俗誌の書き手としてようやく記憶される。作家としてはほぼ忘れられたに等しいが、日本では一時期たいへんよく読まれた形跡がある。

『屋根裏の哲人』は原題を『屋根裏の哲学者—幸福な男の日記』*Un Philosophe sous les toits: journal d'un homme heureux* (1851) という。フランス国立図書館BNの電子図書館Gallicaで検索すると、1851年版(Michel-Lévy, 3e édition)、1856年版、1858年版、1872年版(Nouvelle édition illustrée par Adrien Marie)の4件がデジタル画像で見られる。

国内の大学図書館の所蔵を調べてみると Calmann-Lévy より出版された『全集』*Ceuvres complètes d'Émile Souvestre* 等のほか、英語で注釈を付したとみられる本がいくつか発見できる。書誌を示せば、以下のようになる。

1. Souvestre, Emile. *Un philosophe sous les toits: journal d'un homme heureux*. With Explanatory Notes by Jules Bué. London: Dulau, 1889. [東京大学附属図書館]
2. Souvestre, Emile. *Un philosophe sous les toits*. Edited with Introduction and Notes by H. W. Eve. The University Press, 1892. [愛媛大学図書館]
3. Souvestre, Émile. *Un philosophe sous les toits*. With Introduction, Notes, Exercises, and Vocabulary by Louis M. Moriarty (French and German Reading Books Edited by G. Eugene Fasnacht). Macmillan, 1895. [東京外国語大学附属図書館]
4. Souvestre, Émile. *Un philosophe sous les toits: journal d'un homme heureux*. New Edition Based on the Edition with Notes and Vocabulary by W.H. Fraser (Heath's Modern Language Series). D.C. Heath, n.d. [京都大学吉田南総合図書館、神戸大学附属図書館]

このうち東京大学附属図書館所蔵のものを現物でみると、巻末に英語で注釈をつけた一種の語学書の体裁をとるものであることが分かる。『屋根裏の哲人』は、英語圏の人々がフランス語を学ぶ際に用いるテキストとして大きな需要を持ったらしい³⁰⁾。

『屋根裏の哲人』には英訳がある。大英図書館 British Library およびアメリカ議会図書館

Library of Congress のカタログで調べると、英訳には以下の四種があるようである。

5. *The Attic Philosopher in Paris: or, a Peep at the World from a Garret.* s.l.s.n., 1853.
[*An Attic Philosopher in Paris.* New York: D. Appleton, 1854.]
6. *The Philosopher of the Garrets; or, The Journal of a Happy Man.* Translated by A. A. Bridgman. Warrington: George Powlson, 1867.
7. *An "Attic" Philosopher.* Preface by Joseph Bertrand and Illustrations by A. Robaudi. Paris: Maison Mazarin, c.1905.
8. *A Philosopher under the Roofs.* Translated by John Heron Lepper. London: s.n., 1929.

このうち5の系列に属すると思われる英訳が、日本では大量に翻刻出版された。煩を厭わず国内の大学図書館所蔵のものを出版年の早いものから以下に示す。

- ① *An Attic Philosopher in Paris.* Sanseido, 1897; 1898; 1913; 1914; 1926; 1942.
- ② 巴理屋根裏の哲人 *An Attic Philosopher in Paris.* 菅野徳助, 奈倉次郎譯註。(青年英文學叢書 Juvenile English Literature 第15編)三省堂, 1908.
- ③ *An Attic Philosopher in Paris.* Edited by H. Saito. (The "Brocade" Series of Popular English Literature) Nichi-Eisha, 1912.
- ④ フヒロソーファー. 齋藤秀三郎著。(The "Brocade" Series of Popular English Literature) 訂正再版. 日英社, 1913.
- ⑤ *An Attic Philosopher in Paris.* With Introduction and Notes by Louis M. Moriarty. Hakuikudo, 1917.
- ⑥ *An Attic Philosopher in Paris.* Translated and Annotated by M. Naito; Revised by T. Murai. Taibundo, 1918.
- ⑦ アン・アチック講義 *An Attic Philosopher in Paris.* 内藤明延・村井知至譯註. 泰文堂, 1918.
- ⑧ *An Attic Philosopher in Paris.* With Introduction and Foot-notes by H.W. Eve and L.M. Moriarty. Shobundo, 1922.
- ⑨ *An Attic Philosopher in Paris.* Edited by Ryuji Tabe. Hokuseido, 1925.
- ⑩ 屋根裏の哲人. 小暮春雄訳註。(英文名作文庫第1輯第1巻) 英文学社, 1930.
- ⑪ 屋根裏の哲人. 小暮春雄譯註。(英文訳註叢書第7篇) 外国語研究社, 1932.
- ⑫ *Moral Lessons Adapted from Souvestre's an Attic Philosopher in Paris.* With Introduction and Notes by T. Takamatsu. Okura-kobundo, 1933.
- ⑬ *An Attic Philosopher in Paris.* Edited with Notes by H. Hirohashi. Nan-un-do, 1952.

このほか、英訳によって重訳したと思われる翻訳、

- ⑭ 小原要逸譯『巴里安下宿の哲學者』（内外出版協會, 1910年）
- ⑮ 奈倉次郎・沢村寅二郎共訳『巴里屋根裏の哲人』（学生英文学叢書第6篇）（三省堂、1928年）

などもある。これらを見ると英語講読教材としての「巴里屋根裏の哲人」がいかに広範に使用されていたかがよく分かる。英語教材出版社として有力な三省堂は増刷を重ねたようであるし、北星堂、南雲堂など現在も英語教科書の出版を続けている版元も加わって壮観である。『屋根裏の哲人』が英語教材としていかに有力な商品であったかが想像できる。

英語教材としての『屋根裏の哲人』については、一つの証言を拾いだすことができる。永井荷風（1879～1959）は東京府尋常師範学校附属小学校高等科から、1891年、神田錦町にあった高等師範学校附属尋常中学科2年に編入学した。当時のことを「十六七のころ」に書き残した荷風は（ちなみに「十六七」は数え歳であったろうから満年齢なら十五六のころの回想で明治27, 8—1894, 5年頃にあたる）以下のように書いている。

その頃、英語は高等小学校の三四年頃から課目に加へられてゐた。教科書は米国のナショナルリーダーであつた。中学校に進んで、一二年の間は其頃新に文部省で編纂した英語読本が用いられてゐたが書名は今覚えてゐない。この読本は英国人の教師が生徒の発音を正しくするために用いたので、訳読には日本人の教師が別の書物を用いた。その中で記憶に残つてゐるものは、マコーレーのクライブの伝。パアレーの万国史。フランクリンの自叙伝。ゴールドスミスのウエークフィールドの牧師。それからサー、ロジャース、デカバリイ。巴里屋根裏の学者の英訳本などである。中村敬宇先生が漢文に訳せられた西国立志編の原書もたしか読んだやうに思つてゐる³¹⁾。

荷風が記憶のなかで列挙する英語の本は、Macaulay（1800～1859）の“*Essay on Clive*”、Samuel Goodrich（1793～1860）の *Peter Parley's Universal History, on the Basis of Geography*、Benjamin Franklin（1706～1790）の *The Autobiography of Benjamin Franklin*、Oliver Goldsmith（1728～1774）の *The Vicar of Wakefield*、Joseph Addison（1672～1719）の *Sir Roger de Coverley* もの、Samuel Smiles（1812～1904）の *Self-Help* で、これら英米の作品とともに、フランス語から英訳した「巴里屋根裏の学者」が挙げられているのは、今からみれば実に奇異なことだと言わざるを得ない。ここからも *Attic Philosopher in Paris* という現在は忘れられた（と言つていい）作品が、日本の英語教育史において独特の位置を占めていたことがよくわかる³²⁾。フランス語原典からの訳は、ようやく昭和14（1939）年にいって岩波文庫から木村太郎訳『屋根裏の哲人』が出た³³⁾。

スーヴェストルの『屋根裏の哲人』は、全十二章を一年の十二ヶ月に割りあて、パリの屋根裏に住む老人の身边に起こるささやかな出来事を書き綴る。そこに浮かび上がるのは世俗の成功をよそに見る思索者、国民国家に生きる善良な市民の徳目を顕揚するフランス人の姿である。貧しく不遇でありながら、人間性への絶対的な信頼を貫く。明治期に学校の教室で

講ずるにふさわしい英語教材と判断された理由もそのあたりにあったのだろう。

いささか長い回り道になったが、ここで再び宇野浩二の「屋根裏の法学士」に戻る。この作品は表題にこそ「屋根裏」の語があらわれるものの、作品中に屋根裏らしき空間が描かれることはない。主人公が住むのは日本家屋の下宿の二階であるにすぎないが、そこは以下のように語られるやや特殊な空間である。

さて、法学士乙骨三作の下宿は、ある坂の中腹であつて、しかもそれが往来の面よりも二尺ほど低い地面にたつてゐた。だから、彼の部屋は、往来（すなわち坂）に面した二階にありながら、道をとほる人の顔と、室内にすわつてゐる彼の顔とが殆ど同じくらゐる高さになるので、窓をあけはなして、押し入れの戸をもあけておいて、その寝床の上に横臥しながら、往来のはうを見わたすと、往来の人は、まさか押し入れの中に人がゐるとは思はないから、誰も見てゐる者のない空の部屋のつもりで、無関心な態度で通つて行くので、彼は通つて行く人人を手取るやうに眺めるのであつた。

そこで、彼は、朝寝あるひは昼寝の床の中から、雑誌にも読みあきた目で、眠り入る前の五分か十分のあひだを、芝居でも見るやうなつもりで、坂を往来する人人を眺めた³⁴⁾。

主人公は、起き伏しする押し入れのなかから、戸外を通り過ぎる人々を舞台でも見るやうに眺める。どうやら世外の人物を気取るようだが、物語の展開から明らかなように、俗世間と無縁に生きられるわけでもない。自尊と空想に生きる青年が、世の中に超然たろうとして、やはり生活の重力に引き戻される微妙な位置を、この押し入れの空間は象徴するようである。そして、そのような意味を担う場所を名指す言葉として「屋根裏」ということばが使用されたのだと想像される。

二葉亭四迷（1864～1909）の『浮雲』（1887～1889）を中心にすえて「二階の下宿」を論じた前田愛（1931～1987）は、日本家屋の二階という、いわゆる下宿人たちの多くが住んだ空間について以下のように論じる。

(…) 伝統的な日本の住宅では、二階に通ずる階段は廊下や部屋の片隅にかくされているのがふつうだ。人目につかない場所にかくされた階段で階下と結びつけられている二階の部屋は、どこことなく隠し部屋のおもむきを持つことになる。渡り廊下で連結される離れ家が平屋のうえにかさ上げされたと考えてもいい。〈内〉のなかにあるもう一つの〈内〉なのである。そのかぎりでは日本家屋の二階は、西洋の家屋の二階よりもむしろ屋根裏部屋に近いが、といてパシュラールのいうように地下室と対立して鉛直性の極をかたちづくる屋根裏部屋の機能に相当するものは希薄である。日本の二階は、西洋の屋根裏部屋のように孤独な隠れ場所でありながら、一方では階下の世界とも緊密につながりつめられているのである。二階の住人は階下の世界にたちこめている濃密な人の気配からまったく自由ではありえないし、階下の世界も二階の住人の存在に無関心であることはゆるぎない³⁵⁾。

日本家屋にあっては二階が屋根裏（部屋）の機能を担う空間だとする前田愛の主張にはそれなりの説得力がある。

そしておそらく「屋根裏」という語彙をめぐっては、明治・大正期に学校教育を受けた知識人青年たちの多くに、ある英語教材を介して、共通の理解が生まれていたことであろう。宇野浩二や吉屋信子や江戸川乱歩が、実際に『屋根裏の哲人』を教室で習ったかどうかを問う必要はとくにあるまい。この時代の人々に『屋根裏の哲人』という書名を耳にする機会があり、パリで隠者のごとき生活をする老人の物語であるらしいという（聞きかじりの）知識が広まる環境があれば、それで十分だったであろう。『巴里屋根裏の哲人』の英語教科書が大量に出版され、「屋根裏の」を冠した小説が集中的にあらわれた1910年代に、「屋根裏」は一種の流行語であったと考えられる。

西洋文明に憧れ、欧米の文学を競って読んだこの時代の文学青年たちに、西洋の都市の屋根裏（部屋）はいかなる空間として想像されたか。想像の裡にある屋根裏にいかなる意味を付与したか。（貧しい）日本の家屋の空間の、どこをどう「屋根裏」に見立てたか。やがてヨーロッパに渡り、ほんとうの屋根裏部屋に住む機会を持った幸運な小説家や画家たちは、屋根裏の空間をどのように描き、語り伝えたか。

これらは、日本に軸足を置いた比較文学研究として面白い題材を提供してくれることだろう。

註

- 1) 『萩原朔太郎全集』第十二巻（筑摩書房、1977年）p. 59.
- 2) 池内紀訳『ホフマン短編集』（岩波文庫、1984年）p. 272.
- 3) 『ラ・ボーエム』は、アンリ・ミュルジェ（Henri Murger, 1822～1861）の小説『ボヘミアン生活の情景』（*Scènes de la vie de bohème*, 1849）をもとに、ジュゼッペ・ジャコーザ（Giuseppe Giacosa, 1847～1906）とルイーダ・イリカ（Luigi Illica, 1857～1919）が台本を執筆し、これにプッチーニが曲をつけた。
- 4) “Ampia finestra dalia quale si scorge una distesa di tetti coperti dei neve.” http://www.murashev.com/opera/La_bohème_libretto_Italian_French 訳は拙訳。
- 5) 『トレゾール仏語辞典』*Trésor de la langue française* には“Partie du bâtiment située sous le toit”（屋根の下に位置する建物の部分）および“Sommet, toit d'un bâtiment”（最上部、建物の屋根）との説明がある。
- 6) 『トレゾール仏語辞典』には“Partie la plus haute d'une maison, située immédiatement sous les combles, servant le plus souvent de débarras ou de logement”（屋根組 *combles* の真下に位置する家で最も高い部分で、大抵は不要品の物置か居住空間として用いられる）との説明がある。
- 7) Gaston Bachelard, *La poétique de l'espace*. Paris: PUF, 1957. pp.28-9. 拙訳。
- 8) ほかに loft もあるが、ここでは当面 *garret* と *attic* に話題をしぼることにする。
- 9) 竹林滋編『新英和大辞典』第6版（研究社、2002年）
- 10) Frances Hodgson Burnett, *A little Princess*. 1905; Tar & Feather, 2019. p.74. ただし盛大な誕生パーティの最中、級友のラヴィーニアが空想好きのサラにむかい“Could you suppose and pretend if you were a beggar and lived in a garret?（屋根裏に住む乞食のつもりで、あんたのゴッ

コ遊びやれるかしら?)と挑んでみせる。ここは garret である。

- 11) Charlotte Brontë, *Jane Eyre*. Penguin Classics, 2006. p.125. 拙訳。
- 12) *ibid.*, p.126. 拙訳。
- 13) Gaston Bachelard, *Poetics of Space*. Trans. Maria Jolas. Boston: Beacon Press, 1969. p.10.
- 14) Фёдор М. Достоевский, *Преступление и наказание*. Художественные произведения, т. 6 Ленинград: Наука, 1973. p.5. 江川卓訳『罪と罰』(上)(岩波文庫、1999年) p.11.
- 15) 以上ロシア語に関する記述は沼野充義氏に御教示を得た。
- 16) Fyodor Dostoevsky, *Crime and Punishment*. Trans. Richard Pevear and Larissa Volokhonsky. Everyman's Library. London: Random House, 1993. p.3.
- 17) Fyodor Dostoevsky, *Crime and Punishment*. Trans. Constance Garnett. London: William Heinemann, 1914. p.1.
- 18) Fyodor Dostoïevski, *Crime et châtiement*. traductions et notes par D. Ergaz. Bibliothèque de la Pléiade 83. Paris: Gallimard, 1950. p.39.
- 19) 亀山郁夫『『罪と罰』ノート』(平凡社新書、2009年)
- 20) 上掲書 p. 89.
- 21) 上掲書 p. 91.
- 22) 亀山郁夫は「ラスコーリニコフの屋根裏部屋 [は]、五階建ての建物の「屋根の真下」にあるとされているのだが、ドストエフスキーはこの「屋根」を「屋根板 (кровля)」という言葉で表している」ことに注意を促している。上掲書 p. 185.
- 23) E.T.A.Hoffmann, *Der Sandmann; Des Vettters Eckfenster: zwei Erzählungen*. Leipzig: P. Reclam, n.d. p.12.
- 24) 『鷗外全集』第一巻(岩波書店、1971年) pp. 431-2. 引用にあたり漢字を現行字体に改めた。以下同じ。
- 25) 「舞姫」には「四階の屋根裏には、エリスはまだ寝ねずと覚ほしく、炯然たる一星の火、暗き空にすかせば、明かに見ゆるが、降りしきる鷲の如き雪片に、乍ち掩はれ、乍ちまた顕れて、風に弄ばるゝに似たり。」というくだりもあるが、この「四階」が通常の日本語表現でいう「四階」なのか「五階」なのかについては、かつて近代文学研究者のあいだで論争があつた。
- 26) 『定本漱石全集』第二巻(岩波書店、2017年) pp. 40-1.
- 27) イギリスのナショナルトラストで保存されている Carlyle's House のホームページ <https://www.nationaltrust.org.uk/carlyles-house> が参考になる。
- 28) 『吉屋信子全集1』(昭和50年、朝日新聞社) pp. 365-6.
- 29) 小林隆久『《夢見る部屋》の系譜—宇野浩二とボオの文学における室内空間』(『外国文学』31号、宇都宮大学外国文学研究会、1983年)、鷲崎秀一「宇野浩二「屋根裏の法学士」論：何う云ふ風に社会に泳ぎ出すだらうか」(『阪南論集 人文・自然科学編』53巻2号、阪南大学学会、2018年)等。
- 30) この他英語の注釈のついたものには、Émile Souvestre, *Un Philosophe sous les toits*. New American Edition with a Table of Difficulties. New York: Henry Holt; Boston: Carl Schœnhof, c.1868. と Émile Souvestre, *Un Philosophe sous les toits; with Grammatical and Explanatory Notes by H. Attwell*. London: Hachette, 1899. があるようである。興味深いのはフランス語テキストへの注釈等を独立させた John Francis Davis, *A French-English Vocabulary of All the less Familiar Words in E. Souvestre's Un Philosophe sous les toits*. London: Librairie Hachette & Cie, 1893. や Eugène Gowland, *Notes & Vocabulary to E. Souvestre's "Philosophe sous les toits"*. York: J. Sampson; London: Simpkin Marshall, n.d. といった本が存在することである。フ

ランス語学習教材としての需要は相当高かったとみてよいであろう。

- 31) 『荷風全集』第17巻(岩波書店、1994年) pp. 328-9.
- 32) 川島幸希『英語教師夏目漱石』(新潮社、2000年)は第五高等学校時代の証言として「英語の教科書はジ、エンド(終り)まで読んだことは臍の緒切つて以来一度もなかつた。然るに、夏目漱石先生から教はつた一年間に、『アツチック、フィロソファー』や、『オビヤム、イーター』や、『オセロ』など皆ジ、エンドまで読んだ。其の上『サイラス、マーナー』の半分まで読んだ。教科書を一冊終わりまで読むことは、何でもなしだが非常に嬉しいものである。私は此の喜びを先生から授けて貰つた。」(p.159)という一節を「漱石先生と私」から引いている。漱石は *Attic Philosopher in Paris* をすべて教室で読んだようである。
- 33) 訳者木村太郎(1899~1989)は「解題」で「エミル・スウヴェストゥルは屢ばディケンズに比較される。」と評しているが、これにもかなり驚かされる。ちなみに明治24(1891)年には、森田思軒が第12章“La fin d'une année (The end of the year)”を「歳旦」として『都の花』第54号に発表しているが、これは英訳からの重訳であろう。近年の翻訳としては、田部隆次編『アン・アチック・フィロソファー』(北星堂、1930年)を底本に重訳した和田辰國訳『パリの屋根裏部屋の哲人』(いりす、2016年)がある。
- 34) 宇野浩二『宇野浩二全集』第一巻(中央公論社、1968年) pp.55-6.
- 35) 前田愛『都市空間のなかの文学』(筑摩書房、1982年) pp. 251-2.

【付記】 1923年9月の関東大震災後の東京の街に、復興の過程で実にたくさんの「マンサール」(もどき)を持つ建物が作られた。いわゆる看板建築の文脈で語られるこの不思議な流行現象に私は強い関心を持つ。そのことの歴史的経緯もいずれ明らかにしてみたいと考えている。